

偽りのフィアンセは獲物を逃さない

『誰かを愛するよね、とても幸せな気持ちになれるの』

結婚式前夜。そう言つて微笑んだ姉は、小百合が見惚れるくらいに可憐で美しかった。

そして今日、姉の美貴子は長年の交際を実らせた。豪華なシャンデリアに眩く照らされた披露宴会場。そんな中、純白のウェディングドレスを纏う美貴子は、誰よりも光り輝いている。

(姉さん、幸せそう)

親族席に座る宮里小百合は、友人代表のスピーチを聞いて涙ぐむ美貴子をそつと見守る。瞳を潤ませる美貴子にハンカチを差し出したのは、今日のもう一人の主役である新郎・恵介だ。

六月初旬。大手家具メーカーを展開する宮里グループの社長令嬢・宮里美貴子の披露宴は、盛大に執り行われていた。会場であるここ逢坂ホテルは、都内でも老舗として名高い。招待客はゆうに三百人を超え、政財界の重鎮の姿もある。その他にも各界の華やかな面々が名を連ねていた。

「美貴子さんも恵介さんも、本当に良い笑顔ね」

隣から聞こえた小さな声は、小百合の母である宮里美冬のものだ。

「結婚式つてやっぱり素敵ね。それが実の娘のものならなおさらだわ。次は小百合さんね！ あな

たの花嫁姿、今から楽しみだわ」

小百合は、飲みかけのワインにむせそうになる。まさか、こちらに矛盾が来るとは思わなかった。「わ、私の結婚式って……そんな予定、全然ないわよ？」

「分かっているわ。でもあなただったら、二十八歳になるのにこれまで浮いた話一つないんだもの」「私のことはどうでも——」

「よくありません！ この際だから言わせてもらうけれど、あなた、婚活コンサルタントなのにそれでいいの？ 人様の結婚をサポートする前に、もっと自分の心配をした方がいいんじゃないかしら」小百合が身に覚えがあり過ぎて何も言い返せないでいると、美冬は「実はね」と笑みを深める。

「あなたに紹介したい方がいるの。とても素敵な方なのよ。お名前は——」

「か、母さん。その話は、また今度ゆっくり聞いわ。今日の主役は姉さんよ。だから今は……ね？」小百合が無理やり話を終わらせると、美冬は少しだけ残念そうな顔をしたものの、「それもそうね」と美貴子たちに視線を戻した。

(……結婚、ね。母さんの気持ちも、分からなくはないけれど)

二十八歳——確かに、いざれ結婚するつもりなら、そろそろ真剣に考え始めていい年齢だ。しかし現実問題、小百合には恋人らしい恋人なんて何年もない。

小百合は、決して独身上主義ではない。むしろ仲睦まじい両親を見て育ったからか、どちらかといえば推奨派だ。何より小百合の仕事は婚活コンサルタント。結婚をサポートする立場である。

独身上主義に務まるはずもない。仕事自体は、極めて順調だ。——ただ、一つの問題を除いては。

小百合にとっての唯一の問題。

それは、結婚を斡旋する立場でありながら、「自分に結婚願望がまるでない」ということだ。

良い人がいれば現実的に考えられるのかもしれないけれど、残念ながら、今のところそんな人物が現れる気配は一向になかった。しかしこればかりはどうしようもない問題でもある。

なぜなら小百合は、誰と付き合っても結局は、「彼」と比べてしまうのだから。

(……恵介さん、本当に幸せそう)

小百合は、穏やかな笑みを湛える恵介を見る。彼の視線は、一心に美貴子に注がれていた。その眼差しに気づいた美貴子も恵介を見つめ返す。見ている方が照れてしまうほど仲睦まじいその姿。

——何度、あの視線を……二人の関係を羨ましいと思っただろう。

矢島恵介。姉・美貴子の恋人で夫で、今日から義兄となる人。

そして小百合の元家庭教師で——初恋の人だ。

披露宴よりも少し前、ホテル内のチャペルで執り行われた挙式を思い出す。永遠の誓いを交わした二人は、幸福に包まれていた。そんな姿を小百合は、親族席から大きな拍手とともに祝福した。

(本当におめでとう、姉さん……恵介さん)

姉の結婚を喜ぶ気持ちは本当だ。ウエディングドレス姿の美貴子を見た時、素直に綺麗と思えず、姉を誇らしくさえ感じた。そんな中、ちくりと感じた小さな痛み。

その痛みの正体を、小百合はもう十分過ぎるほど知っている。

なぜならその痛みは、小百合にとって日常の一部になりつつあったのだから。

『初めまして、家庭教師の矢島恵介です』

初対面は、小百合が十七歳の時だった。小百合は、幼稚園から高校までエスカレーター式の私立女子校に通っていた。しかし高校三年生の春、転機を迎えた。

翌年に大学進学を控えていた小百合は、附属大学ではなく外部受験をすることを強く望んだのだ。初めは驚いていた両親も、最終的には小百合の選択を応援してくれた。そして受験対策用の家庭教師として招かれたのが、当時大学四年生の恵介だったのだ。

『今日から一年間よろしくね、小百合ちゃん』

第一印象は、「ぼっとしない人」。あとは、「姉さんと同い年ね」程度だったと思う。

矢島恵介は、真面目を絵に描いたような青年だった。早くに父を亡くし、母子家庭で育った彼は、家計に負担をかけないように奨学金で大学に通っていた。対して小百合の父親は、誰もが名を知る一流企業の経営者。二人の育った環境は、まるで正反対だった。

女子校育ちの小百合は、そもそも異性と接する機会が少なかった。時折父の会社関係で同世代の男の子と会うことはあっても、そのほとんどは、根拠のない自信に溢れたいわゆる「お坊ちゃま」たちだったのだ。

でも、恵介は違った。

物腰の柔らかい話し方。授業はとても分かりやすく的確で、怒ったことは一度もない。笑う時は大口を開けるのではなく、はにかむように笑う。初めて出会う、少しだけ大人の男性。

『いいな』と素直に思った。しかし小百合の中でその気持ちがいずれ以上育つことはなく、小百合の大学合格とともに恵介との関係は自然に終わりを告げた。

その後、大学に入学した小百合は、初めての共学に慣れないながらも刺激的な毎日を送った。

入学して半年後には、初めての彼氏も出来た。

小百合に『一目惚れした』というその人は、小百合と同じ経済学部の二年生上の先輩。恵介とはまるで真逆の遊び慣れた人だった。ミスコンならぬミスターコンのファイナリストにも残った彼との付き合いは、小百合にたくさん刺激を与えた。

——そして、一生忘れられない苦い経験を与えたのも、その人だった。

『俺たち、付き合って三カ月だぞ？ ……そろそろ、いいだろ？』

小百合は、半ば押し切られる形で初体験を迎えることとなった。初めは、わけが分からなかった。ねっとり舐め回すようなキスも、肌に触れる生温かな吐息も、体を這いずる手も、緊張しているせいか全てが怖くて、早く終わってほしくて。そんな、気持ち良さなど微塵みじんも感じない状態で上手いくはずもなく……ただただ動揺する小百合に、彼は言ったのだ。

『なんで濡れねえの。もしかして、不感症？ ……っていうか、処女とか聞いてないんだけど』

小百合を見下ろす彼は、酷く白けた顔をしていた。

結局、最後まですることはなく、その人とはそれきりだ。小百合にとつての初体験は、苦い記憶

として残ったのだった。

それ以降も異性と付き合ったことはある。でもいざそういう雰囲気になると、初めての時の記憶が脳裏を過り、それ以上先に進むことがどうしても出来なかった。その度に自分に問題があるような気がしてしまい……大学三年生になる頃には、誰かと付き合うこと自体をやめていた。

恵介と思いがけない再会を果たしたのは、そんな時だった。

『久しぶりだね、小百合ちゃん』

彼と最後に会ったのは、約二年前。優しい家庭教師などすっかり記憶の底に沈みかけていた頃、恵介は再び小百合の前に現れた。四歳年上の姉・美貴子の恋人として。

小百合の高校時代、恵介と美貴子に面識はなかったはず。二人は、小百合の知らないところで出会って、恋に落ちたのだ。

(姉さんと恵介さんが付き合ってる……?)

懐かしさよりも驚きが先に立ち、同時に「どうして」と思ってしまった。

恵介は、姉の美貴子と並ぶとなんと凡庸な人に見えてしまったのだ。

それもそのはず、美貴子は妹の小百合から見ても才色兼備の女性だったのだから。

大企業の社長令嬢にして跡取り娘。学生時代から学力は全国トップクラス。街を歩けばスカウトの声がかかるのは当たり前。大学時代はミスコンで優勝しているし、社会人なりたての当時は、既に大手家具メーカー社長である父の片腕として日々忙しく働いていた。

誰もが羨む立場の女性。しかし美貴子は、それを鼻にかけることは決してなかった。彼女は、い

つだって笑顔を絶やさなかったし、妹の小百合をことのほか可愛がった。

小百合もそんな姉が大好きだった。だからこそ、『なぜ』と思ってしまったのだ。

(……姉さんは、どうして恵介さんを選んだの?)

当時の小百合には、恵介が美貴子に相応しいとは、とても思えなかった。でもその考えは、彼との人となりを知るうちに変わっていった。きっかけは、両親と恵介の関わり方を見たことだ。

父は初め、美貴子と恵介の関係を認めなかった。跡取り娘である美貴子には、会社のためにも自分の選んだ相手と結婚してほしいからだ。門前払いは当たり前。付き合い始めて数年経ち、ようやく初めて恵介と会った時も、父は目を合わせることをさえしなかった。それでも恵介は、美貴子のことを諦めなかった。小百合や美貴子にとっては娘思いの父親でも、恵介にとっては、融通の利かない面倒な存在だったはず。でも、恵介が父を悪く言うことは一度もなかった。

『恵介さんは、どうしてそんなに「良い人」なの?』

弱音一つ吐かず真摯に姉を想う恵介に、小百合は一度だけ聞いたことがある。

『僕は「良い人」なんかじゃないよ』

答えは、明快だった。

『ただ、美貴子さんのことが大好きで、大切なんだ。そして彼女をそんな風に育てたのは君たちのご両親だ。感謝こそすれ、嫌うことなんてないよ。確かに認めてもらえないのは残念だけど……それなら、認めてくれるまで僕はいつまでだって待つ。彼女と一緒にいるために出来ることはなんだったってする、それだけだよ』

その言葉に目が覚めるような気がした。今まで自分が「冴えない人」と思っていたその人の見方が変わったと同時に、小百合は気づいた。

(こんな恵介さん、私は知らない)

恵介と出会ったのは、小百合の方がずっと先。でも小百合は、彼がこんなにも熱い気持ちを内に秘めているなんて知らなかったのだ。

それから数年。ついに父は折れ、二人の交際を認めた。

小百合は、惹かれ合う二人をずっと近くで見えてきた。ひたすら姉を想い続ける恵介にいつしか興味を持ち、あんな風に一途に誰かを愛する姿を素敵だと思うようになっていた。

自分にはそんな経験がなかったからこそ、二人の関係が眩しくて、羨ましく感じてしまった。

(……そっか)

『いいな』

そう感じた高校生の自分。

(私、恵介さんのことが好きだったんだ)

それは、あまりにも遅過ぎる初恋を自覚した瞬間だった。



披露宴が無事終了したその日の夜。小百合は一人、ホテルのラウンジにいた。

逢坂ホテルといえば、名の知れた老舗ホテルである。

姉夫婦の結婚式会場がここだと知った時、客室を一室押さえておいた。レストランやパーティー会場は、仕事やプライベートで何度か利用したことがあるけれど、宿泊する機会はなかなかなかった。ならば、この機会にのんびり一人で羽を伸ばそうと思ったのだ。

(一度、泊まってみたかったのよね)

逢坂ホテルは宮里グループの大手取引先。その繋がりもあり、両親や姉はよく利用するらしいが、小百合は今日が初めてだ。というのも、小百合は、宮里グループに所属する人間ではないからだ。大手企業の社長令嬢であることを隠して就職活動をし、結婚相談事業やイベント事業をメインとした会社に就職した。

そこで婚活事業のノウハウを学ぶこと三年。

人と人を繋げる喜びを知った小百合は、二十五歳の時に婚活コンサルタントとして独立した。今では一応、社長として、自分を含めた従業員数三人の会社を経営する身である。

父は、小百合にグループに入社し、将来的には美貴子を支える存在になってほしいと望んでいた。しかしその道は、恵介への気持ちを自覚した時に選択肢から消えた。

父が恵介を認める——それは、恵介が婿入りすること。つまりは、彼は宮里グループの一員となる。

初恋の人と職場で顔を合わせるの、さすがに辛い。それに、幼い頃から家を継ぐのは姉の美貴子と決まっていた。ならば一度でいい、自分の力でどこまで出来るか試してみたかったのだ。

大学を外部受験した理由の根底もそこにある。結果として一般企業に就職した小百合だが、後悔はしていない。大学時代、恋愛では確かに苦い経験をってしまった。しかし自分をお嬢様扱いしない環境は、今まで知らなかった刺激を与えてくれた。

独立した今は、順風満帆とは言えないものの、食べるのに困らない程度の生活は送れている。とはいえ贅沢ぜいたくが出来るほどではなく、だからこそ今日は、自分へのご褒美ほうびとして宿泊しようと思っただけだ。

(……少し、疲れた)

とても素敵な結婚式だった。笑顔の溢れる幸せな空間だった。そんな中感じた小さな痛み。

いつもは気づかないフリをしているけれど、今日だけは、それを抱えて自宅に帰る気にはなれなかった。こんな気持ちのまま、誰も待つ人のいないマンションに帰るのは、なかなかしんどい。

だからこそ部屋を取っておいて本当に良かったと思う。心地良いBGM。窓の外は一面に広がる夜景。豪奢ごうしゃな一方、どこか居心地の良い空間は非現実的で、日常や今日の出来事を少しだけ忘れさせてくれる。小百合はなんとはなしに周囲に視線を向ける。

数席離れた隣にカップルらしき男女と、ボックス席には男性客が数人。さっと見渡したところ、女性の一人客は小百合だけだ。しかしかえってそれが小百合の緊張をほぐした。

「ジントニックをいただけますか？」

カウンターに座った小百合は、好きなカクテルを注文する。

(……美味しい)

すっきりとした中に感じる爽さわやかな香りに息をついた時だった。

「——しっかし、恵介のやつも上手くやったよな」

耳に飛び込んできた大声に小百合は視線を向ける。そこには、大分酔っているらしい二人組の男がいた。彼らには、見覚えがある。確か恵介の元同僚で、今日の式に参加していたはずだ。

「彼女がいるのは聞いてたけど、相手がまさか社長令嬢とはなあ」

「しかもめちゃうくちゃ美人！ いいよなあ、俺もあんな綺麗な嫁さんが欲しいわ」

「ばーか。お前なんか相手にされるかっての」

「恵介がいたんだから俺でも大丈夫だろ。俺も仕事を辞めて婿入りしたいよ。ただのサラリーマンが一気に宮里グループ創業者一族に仲間入りだもんな、あれが本当の逆玉ってやつか」

よほど楽しいのか、声は段々と大きくなっていく。周囲の客が眉を寄せているのに彼らはまるで気づかないらしい。しかし今この場において、最も険しい顔をしているのは小百合だろう。

祝う人がいれば妬ねたむ人もいる。それは仕方ないことなのかもしれない。しかし披露宴を終えればかりの今日、会場と同じホテルのバーで大声で話すには、あまりに相応ふさわしくない会話だ。

「でも、なんで恵介なんだろうな？ クソ真面目だし、長所といえば人当たりが良いことくらいなのに。顔面偏差値で言ったら、俺の方が全然高いと思うんだけど」

「お前、自分で言うか？ まあ確かに、誰が見たってお前の方がマシかもな」

「だろ？」

一体どこが、恵介よりマシだというのか。ぎしり、とグラスを持つ小百合の手に力が入る。

(そんなことを言ったら、あなたなんて『顔だけ』じゃない)

真面目で誠実で人当たりが良い。それこそが恵介の長所であり、小百合が彼に惹かれた最大の要因だ。ようやく昇華しかけた恵介への気持ちに踏みこじられたような気さえしてしまう。

「でも、妹もかなり美人だったよな。ほら、茶髪の青いドレスを着てた。新婦側の親族席にいただろ？ あれ、新婦の妹だって」

小百合はぎくりとする。まさか話題の矛先が自分にまで向くとは思わなかった。

「あー、いたいた！ キツめの顔した美人だろ？ かなりいい体してたから覚えてるよ。姉妹なのに新婦と全然タイプが違うよな」

「姉はいかにもなお嬢様だけど、妹は……なんつーか派手？ 姉がモデルなら妹はグラドルか、みたいな」

「確かに！」

彼らは愉快げに笑う。一方の小百合は、湧き上がる怒りと羞恥心を必死に抑えていた。

——似ていない、と言われるのには慣れている。

百七十七センチの姉と、百五十六センチの小百合。清楚な姉と派手な妹、と周囲に見られていることは知っていた。昔から、細身の美貴子に比べて、小百合は肉付きが良い方だったからだ。

——主に、胸回りが。

モデルとグラビアアイドル。

なるほど、言い得て妙だ。

華奢な体と庇護欲をそそる楚々とした雰囲気を持つ姉は、小百合の憧れでもあり、コンプレックスでもあった。昔は、少しでも姉に近づこうと服装やメイクを真似したこともある。しかし自分でも笑ってしまうほど似合わなくて、結果的に行きついたのが、姉とは正反対の路線だったのだ。

ナチュラルメイクとは対照的な、大きな瞳とふくらした唇を活かしたはつきりしたメイク。

もちろん厚塗りをするのではなく、派手に見えないようバランスを整えている。服装は緩やかな服はかえって太って見えることから、比較的体のラインを強調したものを。しかし、下品にはならないように。

親族として列席した今日のドレスは、ネイビーのドレスだ。デザイン自体はタイトなものだが、袖口までレースで覆われており、全体的な露出度は高くない。代わりに首筋部分は大きく開いているものの、かえってデコルテを綺麗に見せていた。それは、今日の披露宴に相応しいようにと選んだものだ。こんな風に酒の肴になるために選んだのではない。

「妹は独身らしいし、なんとかそつちを狙えないかなー、なんてな」

(あなたたちなんて、こつちからお断りよ！)

気分が悪い。これ以上続くようなら軽く注意を試みようか。しかしそんなことをして、姉夫婦に迷惑がかかってはいけない……そう、思っていたのだけれど。

「でもまあ、姉の方も変わってるよ。あれだけ美人で社長令嬢なら、男なんてよりどりみどりでろ？ それなのに凡人の恵介を選ぶなんて、よっぽど趣味が悪いか、物好きのどつちかだな」

この言葉をきっかけに小百合は席を立った。向かうのはもちろん、彼らのもとだ。

「こんばんは」

しゃんと背を伸ばした小百合は、突然声をかけられて固まる二人と向き合う。そして蠱惑的に見えるよう、あえてゆったりと笑む。

「今日は、姉と義兄の披露宴にご列席いただきありがとうございます。皆さんのおかげでとても良い思い出になったと、姉夫婦も喜んでおりました」

「姉夫婦って……あつ！」

今まさに話題にしていた人物の登場に、男の顔がぎくりと強張る。それはもう一人も同様だった。対する小百合は笑みを深める。

「申し遅れました、宮里小百合と申します」

その後の二人と言ったら実に見物だった。

一人は一気に酔いがさめたように青白い顔になり、もう一人は小百合から顔を背ける。よほど気まづかったのか、二言三言小さく挨拶をして足早に去っていったのだった。

(逃げるくらいなら、初めからあんなこと言わなければいいのよ)

ふん、と内心息まきながら、今度こそ静かにお酒を飲もうと小百合はカウンター席へ戻る。

「……すごいな」

その時、そんな吹きともにくすりと笑ったような声が聞こえた。

声の方を向く。しかし数席空けた隣には、長身の男性とその連れだろう女性がいるだけだ。どことなく含みのあるような——小馬鹿にしたような笑い声に聞こえたのだが、空耳だろうか。

(気のせい?)

イライラして幻聴が聞こえるなんて、さすがに良くない。

(……とにかく今日は、酔えるだけ飲んで、早く寝よう)

明日は、朝食を楽しんでからのんびり帰宅すればいい。このホテルはサービスだけではなく、食事が美味しいことでも有名だ。朝食のビュッフェのことを考えると少しだけ気分も浮上する。

その後、カクテルを楽しむことしばらく、ほどよく酔いが回り始めた。

(気持ち良い)

心地よい音楽に耳を傾けながら、小百合は改めて今日一日を振り返る。

——正直なところ、今日この日をどんな気持ちで迎えるのか、ずっと想像出来なかった。

何せ主役は、憧れの姉と初恋の人。悲しくなるのか、それとも辛いのか……しかし当日を迎えた時、自分でも驚くくらい穏やかだった。確かに、小さな痛みは感じた。それでも永遠の誓いを交わす二人の姿に、何か吹っ切れたのかもしれない。幸せになってほしいと、心から思うことが出来た。

(恵介さんを好きだったのは、本当)

でも振り返れば、彼と「付き合いたい」とか「キスしたい」と望んだことは一度もなかった。

もちろん、美貴子から奪ってやろうなんて考えたこともない。

(……それも、そっか)

小百合が魅力的だと思ったのは、たとえ誰に何と言われても一途に姉を想う恵介だった。

そんな彼の姿にこそ、惹かれたのだから。

(私の初恋は、これで終わり)

酔いが回ってしまったのだろうか。涙腺が緩んで、目の奥が熱い。長年の想いにさよならを告げるのは寂しいけれど、恵介を想うのは今日で終わりにしよう。明日からはまたいつものように仕事に励めばいい。そう、少しでも前向きな気分になれた時だった。

「——それって一体、どういうことよ！」

女性の声が響いた。

(今度は、何?)

ぎよっとして隣を見る。小百合に背を向けた男性の隣には、椅子から立ち上がり怒気を露わにする女性がいた。彼女は、だん！ とカウンターの叩く。そのはずみでカウンターのグラスが倒れたが、女性は気にする素振りもなく、威嚇するように隣の男性を見下ろしている。

「藤堂さん、あなた自分が何を言っているのか分かっていないの？」

「もちろん、分かった上で言っているよ」

対する藤堂と呼ばれた男性は、後ろ姿からでも分かるくらい冷静だった。

「何度も言っている通り、俺はまだ誰とも結婚するつもりはない。もちろん、君ともね」

「……私は今日、お見合い相手としてここにいるのよ。それなのに結婚するつもりがないってどういうこと？ それだけじゃないわ！ 『他の女性にも同じことを言っている』って、私以外にもお見合い相手がいたって言うの？」

「すごいね、全部正解。君の言う通りだ」

「なっ……馬鹿にしないで、私は真面目に言っているの！」

「俺も真面目に言っている。俺に結婚の予定はない。大体、君は俺のことを何も知らないだろう？ それは俺も同じだ。まあ、特に知りたくとも思わないけどね」

「——さいつてい！ 地獄に落ちろ！」

パチン！ と耳に痛い音が響いた。手を振り下ろした女性は、怒りを収めることなく男性を睨みつけて去っていく。一方、平手打ちされた男性は、遠ざかるヒール音を全く気にする素振りもなく、ため息をついた。

「騒がせてすまなかったね、マスター。迷惑をかけたお詫びは後で必ずさせてもらおうよ」

こんな修羅場には慣れていような男性の様子に小百合は呆れた。

「……ゆっくり飲みたいのに。痴話喧嘩ならよそでやってよ」

たまらず零れたため息交じりの愚痴を、相手は聞き逃さなかつたらしい。

「聞こえているけど？ 随分と大きい独り言だね」

小百合のすぐ隣に男性が座る気配がする。まさか隣に来るとは思わず一瞬体が強張るけれど、視線は向けなかった。せつかく落ち着いた雰囲気求めてここに来たのに、これ以上の厄介ごととはごめん。小百合は、隣を見ることなく手元のグラスの中身を啜る。

「ちなみにさっきのは、痴話喧嘩にはあたららない。彼女は恋人じゃないからな。もちろん、手を繋いだことすらない」

「私には関係ありません」

顔も見ずにきつぱりと言いつつ。一方男性は、そんな態度の小百合にくくと笑った。その声にはなんとなく覚えがある。

「両親に呼び出されて来てみたら、知らない女の子が『婚約者です』って待ってるんだ。冗談じゃないよ。とはいえ、来て早々『さようなら』じゃさすがに失礼だからね。食事だけは付き合っただ、それだけで恋人気取りだ」

やはりこの声は、先程空耳かと思つた笑い声と同じもの。しかも、この男性は随分と自分に自信があるらしい。どこか人を小馬鹿にしているような、自信家の男。小百合の最も苦手とするタイプだ。

一体どんな人物なのか。つい、小百合はグラスを置いて隣に顔を向け……たまらず息を呑んだ。最初に射貫かれたのは、その瞳。切れ長の二重の瞳は、どこか愉快げに小百合を見据えている。

ただ見られているだけなのに、まるで獲物を狙っているかのような獐猛さを感じた。

緩く後ろに撫でつけた黒髪。すつと通つた鼻梁、その下で蠱惑的な孤を描く形の良い唇。身に纏うスーツの上からでも分かるほど引き締まった体に、長い手足。格好良い男性なら出会つたことがある。しかしこんな風に、そこにいるだけで色気を感じるような男性は、初めてだ。

「……君？」

男性の呼びかけに小百合ははつとする。

(やだ、私つたら)

不躰に見過ぎてしまった。さすがに失礼だっただろうか、と男性の顔から視線を外した小百合は、あることに気づく。男性のシャツの袖がわずかに濡れていたのだ。

そういえば彼を叩いた女性が立ち去る際、グラスが倒れていた。
「……これ、良かったらどうぞ」
気づいてしまった以上、見なかったフリをするのも寢覚めが悪い。

小百合はバッグからハンカチを取り出して男性に差し出す。しかし男性にとつては予想外の行動だったのか、彼は小百合とハンカチを交互に見るものの、一向に受け取ろうとしない。

「あの？」

「それが必要なのは、君の方だと思うけど」

「え……？」

「目が赤いよ」

「こ、これは！」

小百合は慌てて顔を背けようとする。しかしその寸前、男性の指先が小百合の顎に触れた。

「それに……今にも泣きそうな顔してる」

予期せぬ行動に逃れる隙もなかった。男性は、目を見開く小百合の顎を親指でくいつと持ち上げたのだ。

「綺麗なドレスを着た女性がホテルのバーで一人飲んでいる。その上、涙目ときた。どうしたの？もしかして失恋でもした？」

「なっ……あなたには、関係ありません！」
小百合はパシン！と男性の手を払った。

(なんて失礼な人なの)

凶星をさされてかつとなる。赤い目をして睨む小百合を、男性は余裕たつぷりの様子で見返した。
「その様子だと、正解か」

本当に、どこまでもデリカシーのない男だ。こういう輩やからに遠慮はいらない。

「酔っぱらいに絡まれるのは好きじゃないの。それにもう一度言うけれど、私が泣いていようと……それがどんな理由であろうと、あなたには関係ないわ」

「ああ、ないね。でも、気にするなって言う方が無理な話だ」

「……どうして？」

偶然、隣に居合わせただけの自分を、なぜそんなに気にかけるのか。

「だって、酷い顔だ」

返ってきた声はやはり、からかうような響きがあった。その声に小百合は無言で立ち上がる。

「さっきの彼女があなたを叩いた理由がよく分かったわ。あなた、失礼過ぎるのよ。……最低ね」

「待って、君——」

背中を向ける小百合を呼び止める声がしたけれど、振り返ることはない。

(最悪だわ)

触れられた場所が熱く感じるのも、心臓がドキドキしているのもきつと気のせいだ。

II

姉夫婦の結婚式から三カ月。九月のとある日曜日、小百合は炎天下に晒さらされていた。

「暑い……」

黒の日傘を片手のため息をつく。近年稀まれに見る猛暑に加え、連日最高気温が各地で更新されている、九月はまだまだ夏の気配が色濃く残っている。

(ああ、ビールが飲みたい……)

昔から暑いのは、大の苦手だ。アスファルトに反射した熱がなんとも憎らしい。日傘に加えて全身には日焼け止め、両手にはしっかりとアームカバー。日焼け対策は万全だが、全身をガードしているのが暑苦しくて、一歩歩くごとにうんざりする。

こんな炎天下の中、小百合が向かう先は実家である。小百合のマンションから実家までは電車と徒歩で三十分。仕事ならばタクシーを使用するけれど、プライベートでは節約出来る部分は極力するようにしている。経営者とはいえ、会社はまだまだ軌道に乗り始めたばかり。贅ぜいたく沢は敵だ。

今日、実家に帰る理由は他でもない、母に呼び出しをされたからだ。母の美冬は、三カ月前の結婚式にいたく感動したらしい。それはいいのだが、厄介なのは、その熱が今度は小百合に向かってしまったことだ。

「……母さんったら、お見合いは考えてないって何度も言ったのに」
姉の結婚式以来、小百合は、母から頻繁にお見合いの話を持ち掛けられていた。

確かに披露宴の時「紹介したい人がいる」と言っていたが、そんなことすっかり忘れていた。
(まさか、あれが本気だったとはね)

あまりにも勧めてくるものだから、おかげでここ最近はずっかり実家から足が遠のいている。
しかし母は、諦めなかった。

(母さんも、私のことは放っておいてくれればいいのに)

連日の電話の帰省要求。結局、折れたのは小百合だった。電話でいくら断っても、母は諦めない。
ならば直接、自分の口からはつきりと断ろうと決めた。

「……やっと着いた」

額に滲んだ汗をハンカチで拭うと自然とため息が漏れる。

最寄りの駅から約十五分。閑静な住宅街の中で一際存在感を放つ建物が小百合の実家だ。

美冬の趣味で建てられた洋風の家は、まさにお屋敷。小百合は門の前に立つと呼吸を整え、インターホンを押した。すると何秒も経たないうちに、『小百合ちゃん！』と嬉しそうな声が返ってくる。

『わざわざ押さなくてもいいのに。すぐに開けるわね』

小百合が玄関のドアに手をかけるより前に、内側から開かれた。

「おかえりなさい！ 結婚式以来ね、会いたかったわ」

中から現れたのは、スーツ姿の美貴子だ。彼女は軽く小百合にハグをしたのち、にこりと笑う。

「全然顔を見せないから心配してたのよ。お仕事が忙しいって母さんから聞いているけれど、ちゃんと食べてるの？」

過保護な姉に小百合は苦笑した。

「大丈夫よ。それより姉さんこそ、その格好。日曜日なのに、今から会社にも行くの？」

「そうなの。ほら、結婚して恵介さんもうちに入社したでしょう？ これを機に私も父さんから少しずつ業務を引き継いでいるの。その関係で少しバタバタしててね」

「その……恵介さんも、今日は出社してるの？」

「ええ。夫婦揃って休日出勤ね」

美貴子は肩をすくめた。一方、小百合は内心ほっとする。吹っ切ったとはいえ、結婚式以来の恵介との再会に密かに緊張していたのだ。

「でも、出かける前に会えて良かった。近いうちにまた顔を出してね」

「分かった、約束するわ」

美貴子は「絶対よ？」と念を押した後、小百合の横を通り過ぎようとする。その時、気づけば小百合は「姉さん！」と呼び止めていた。

「姉さんは今、幸せ？」

不意打ちの質問に、美貴子は驚いたように大きく見開いた後、

「幸せよ。とっても」

と、ふわり、と花が綻ぶように微笑んだのだった。

「小百合さん、おかえりなさい！」

両親は——特に美冬は、娘の三カ月ぶりの帰省を歓迎した。姉と揃って大袈裟だなあと内心苦笑しつつも、帰りを喜んでくれるのは嬉しい。「ただいま、母さん。父さんは？」

「リビングにいるわ。さあ、早く上がって。お茶の準備は出来てるわよ！」若干テンションの高い母と静かに微笑む父親。この雰囲気ならば、「お見合いは今のところ考えていない」と切り出しやすい。

しかし、甘かった。母親がご機嫌な理由は、他にあったのだ。

それは、リビングルームのソファに座り、両親と談笑して少し経った頃だった。

「それでね、小百合さん。電話で話していたお見合いのことだけれど……」

——来た。

ソファに座った小百合は身構える。

（ここではつきりと断っておかないと）

今日は、そのためにわざわざ帰ってきたのだから。

「母さん。私、やっぱりまだ結婚するつもりは——」

「来週の水曜日、二十時。場所は逢坂ホテルで決まったから、よろしくね」

一瞬、時間が止まった。

「……今、なんて？」

空耳だ。空耳に決まっている。

今の小百合は、グラスの中のアイステイーを零さないようにするのがやっとだった。ほんの少しでも気を抜いたら、間違いなく絨毯はびしょ濡れになっていただろう。

「だから、来週の——」

「そうじゃなくて！ 来週お見合いがあるなんて聞いてないわ！」

「あら、今言ったわ」

美冬は、あっさりと答える。

「先方が、お仕事の関係でどうしても休日は時間が取れないから、平日を希望されているの。小百合さんも、その日は落ち着いているって言っていただけでしょう？」

「それは、言ったけど……そうじゃなくてっ！」

来週の事はそれほど立て込んでいない。近々の予定を聞かれた時にそう答えたのは確かだが、その時は母がこんな強硬手段に出るなんて思わなかったのだ。

「時間まで約束してあるなんて、嘘でしょう……？」

その上まさか、本人の知らないうちに日程まで決定しているなんて。お願いだから、自分の聞き間違いであってほしい。しかし対面のソファに座った美冬は、「本当よ」とにこにここと微笑む。

まるで悪びれる様子もない母の態度に、小百合は怒るより前に毒気を抜かれてしまった。

「お相手のお名前は、逢坂瑞樹さんとおっしゃるの」

「ちょっと待って、逢坂つてまさか……」

「その『まさか』よ。逢坂ホテルの跡取りでいらっしやるわ。年齢は、小百合さんの二歳年上で三十歳。ちようどいいと思わない?」

一体、何が「ちようどいい」というのか。

断るつもりのお見合いが既に決定していて、しかも相手はあの逢坂ホテルの御曹司……

(あ、頭痛い)

あまりの展開に理解が追いつかない。その間も「本当に良い方なのよ!」と揚々と続ける美冬に、小百合はたまたま母の隣で苦笑する父・宮里正史をじろりと見た。

「……父さんは、どう思ってるの。こんなの急過ぎるわ」

娘の低い声に、正史は肩をすくめる。

「確かに急なのは間違いないね。でもまあ、小百合も初めからはね付けしないで、話だけでも聞きなさい。母さんだって、良かれと思っただことなんだから」

「だからって、いくらなんでも展開が早過ぎるのよ……」

父は、昔から母にとても甘い。何年経っても妻を大事にする父は素敵だと思う。でも、それとこれとは話が別だ。小百合がいよいよ凹へこんでいると、父は苦笑しつつ続ける。

「今回の話は、逢坂さんから『是非に』と持ち掛けてきたんだ」

「どうして? 姉さんならともかく、私は宮里グループの人間じゃないわ。逢坂瑞樹さん……? その人に会ったこともないのに」

不思議なのはそこだ。逢坂ホテルの御曹司なら結婚相手は引く手数多あまたのはず。仮に宮里グループとの関係を強固にしたいのであれば、社外の人間である小百合は対象外のはずだ。

『『一目惚れ』だそうだ。美貴子の結婚式で小百合を見て以来、ずっと気になっているんだって』

「……待って。私、逢坂さんとお話した記憶なんてないわ。大体、挙式に招待したのは逢坂社長——逢坂瑞樹さんのお父様で、息子さんの名前はなかったはずよ」

「彼は、逢坂ホテルの跡継ぎなんだ。あの日、ホテルにいても何もおかしいことはないだろう?」

「それは、そうだけど……」

「もう! そんなこと気にしなくていいじゃない。一目惚れなんて、素敵だと思わない?」
父の隣で美冬がうっとり片手を頬にあてる。だが、冗談じゃないと小百合は思った。

この時小百合の脳裏に過よつたのは、記憶の奥底に押し込んでいた存在だった。

(同じことを、あの人も言っていたわ)

初めて付き合った人も、「一目惚れ」したと小百合に告白した。当時、世間知らずの小百合はそんな一言に舞い上がって、浮かれて……その結果が、今だ。

一目惚れなんて、小百合が最も信用出来ない言葉のうちのひとつだ。

(結局は、見た目が好みだった、っただけじゃない)

無意識に拳こぶしに力が入る。顔を強張こわばらせる娘に父は穏やかに続けた。

「逢坂ホテルと宮里グループの付き合いが長いのは、小百合も知っているね?」

小百合は小さく頷く。新卒で一般企業に就職した小百合は、家業にはほとんど関わっていないけ

れど、逢坂ホテルと懇意こんいにしているのは知っていた。

「正直、逢坂ホテルは大口の取引先でもあるし、一度承諾したことをこちらの都合で『やっぱりなしに』とは言いいにくい部分もある」

「それは……確かに、そうだろうけど」

小百合も会社を経営する身。会社にとつて信頼がいかに大切かは、多少なりとも分かっているつもりだ。だからこそ、「そんなの私に関係ないわ」とは、言えなかった。

「小百合が絶対に嫌だというのなら無理強いはいしないよ。でも、私も彼を知っているが本当に気持ちの良い男性でね。どうだろう。一度だけでも会ってみないか？」

性急な母とは違う父の勧めに、わずかに良心が揺れる。

「もちろん、実際にお会いして小百合が『違う』と感じるようであれば、仕方ない。その時は、父さんから先方にお断りする」

「でも……」

やはり、急なお見合いなんて気乗りがなくて、小百合は渋る。そんな娘に、正史はすつと目を細めて言った。

「——それとも、どうしてもお見合い出来ない理由があるのかな？」

「え……？」

「例えば、私や母さんが知らないだけで、実はお付き合いしている人がいるとか。まさか、親に言えないような相手じゃないだろうね？」

何を言うかと思えば、見当違いもいところだ。

「そんな人、いません」

小百合が否定すると、正史は「なら良かった」と笑みを深める。

「……何？」

この時、小百合は違和感を覚えた。小百合に語りかける父の声は穏やかだけれど、目の奥は笑っていないように見えたのだ。そしてそれは、気のせいではなかった。

「もしかしたら、小百合は恵介君のことが好きなんじゃないかと思ってね」

「……え？」

——父は今、なんと言った？

固まる小百合と、笑みを湛たえる正史。

「やだわ、あなただったら！」

沈黙を破ったのは、美冬だった。彼女は呆れたと言わんばかりに肩をすくめる。

「そんなことあるわけじゃないじゃない。ねえ、小百合さん？」

「え……あ……」

同意を求められて、答えに詰まる。

——父は、私の恵介さんへの気持ちに気づいていた？

一気に心臓が早鐘を打ち始める。小百合は、頬が強張りこわばりそうになるのをくつと堪こたえた。

(落ち着いて)

深呼吸をしてなんとか気持ちを整える。正史がなぜ突然こんなことを言ったのかは分からない。でも、ここで動揺した姿を見せてはいけないことだけは、間違いなかった。

「恵介さんのことは好きよ。もちろん、『家族』としてね」

目の奥を光らせる正史を、小百合は見返す。そんな娘を正史はじつと見据えた後、にこりと笑んだ。

「それもそうか。いやなに、母さんじゃないが、小百合があまりに男性と縁遠いように見えたから、まさかと思つてね。それに昔から随分と恵介君を慕っているようだから」

「私が高校生の時からお世話になってるんだもの、当然だわ」

「確かに、それもそうか」

その答えにほつとする。この流れでお見合い話もなかったことにならないか——そう思ったもの、つかの間だった。

「——それなら、お見合い出来ない理由はないということだ」

「……あ」

(ど、どうしよう)

これ以上頑かたなお見合いを断れば、今度こそ父に不審がられる。この状況で小百合が返せる答えは、一つだけだ。

「……母さんには何度も言つたけど、今は仕事を一番に頑張りたいし、まだ結婚するつもりはないの。そんな状態でお会いしても先方に失礼だと思うけど、それでもいいのね？」

「もちろん、それで構わないよ」

「……分かったわ。一度だけでいいなら、お会いします」

かくして、小百合の初めてのお見合いが決まったのである。



そして、約束の水曜日。小百合の会社、株式会社マリエ・リリースの入るオフィスからお見合い会場の逢坂ホテルは、電車を乗り継いで三十分の距離だ。

(待ち合わせは、二十時。十九時に出れば余裕ね)

父の手前、遅刻なんてもつての外。会うだけ会って、早めに終わらせようと心に決める。

終業時刻の十八時、業務用のパソコンに視線を落としていた小百合は、顔を上げる。

「三村さん、相川君。お疲れ様、時間よ。今日はもう上がれそう？」

小百合の声かけに、向かって右側のデスクにいる三村が「んー！」と大きく両手を上げて伸びをする。

「急ぎの案件もないですし、私はこれで上がらせてもらいます。あー疲れた、肩がばつきばき！」
それを見て苦笑するのは、向かって左側のデスクにいる相川だ。

「三村さん、年よりくさいですよ。一応、まだ二十代でしょ」

「……相川君。それ、私だから許すけど、他の会社で言ったらセクハラ案件だから」

「はいはい、気を付けます」

大袈裟に怒った表情を見せる三村と、そんな彼女を適当に宥める相川。見慣れたいつものやりとりに小百合は苦笑する。

株式会社マリエ・リリースの社員は、全部で三名。社長の小百合と事務担当の三村、そして営業担当の相川である。三村と相川とは、小百合が新卒で入社した会社で知り合った。

三村は小百合の一年、相川は二年後輩。いずれも小百合が独立すると決めた時、自らついてくると言ってくれた、いわば小百合の同志のようなものである。立場的には経営者と従業員ではあるものの、二人は親しみを込めて未だに「社長」ではなく「小百合さん」と呼んでいる。

「小百合さん、俺も今日はこれで上がれます。もし何か手伝うことがあれば、残りますけど」

「ありがとう、でも大丈夫よ。私もこの後予定があるし、十九時には帰るつもりだから」

「そうですか？　じゃあ、失礼しますね。お疲れ様でしたー」

相川が帰ると、待つてましたとばかりに三村が「小百合さん！」と身を乗り出してくる。

「三村さん、どうかした？」

「ズバリ聞きます。小百合さん、もしかして……彼氏、出来ました？」

「ど、どうしたの、急に」

不意打ちの問いに小百合は固まる。それを三村は肯定と捉えたらしい。

「やっぱり！　そうだと思っただんです、いつもはパンツスーツなのに今日に限ってスカートなんですよん。お化粧もいつもよりバッチリだし、ネイルも変えましたよね」

確かに今日の小百合の格好は、普段よりも気合の入ったものだ。

普段は動きやすさを重視したパンツスーツが多いが、今日は夜の予定を意識してワンピースを着ている。普段は簡単にハーフアップにしている髪の毛は、編み込んでアップにした。昨夜、仕事終わりにネイルサロンに行ったのも合っている。

「今日はやけに目が合うなあと思っただけ……よく気づいたわね？」

「そりゃそうですよ！　小百合さん、仕事の時はシンプル系が多いでしょう？　でも、今日はそんなに可愛いから」

さすがにお見合いにいつもの格好で行くのは憚られる。先方も小百合が仕事終わりで行くのは承知しているので、あまり華美にならない程度にお洒落してみたのだけれど。

「……変かしら？」

「全然！　すごく可愛いですー！」

やけに力説する三村に小百合は「ありがとう」と苦笑した。以前の会社からの知り合いということもあり、三村との付き合いは深い。昼休みにランチに行くのはしょっちゅうだし、休日に買い物に出かけたこともある。そんな気安さもあり、小百合は素直に言った。

「実は今日、この後見合いがあるの。だから最低限、失礼にあたらない格好をしてきただけよ」

残念ながら彼氏が出来たわけではないのだ、と伝えると、三村はぼかんと小百合を見つめる。

「お見合いって。小百合さん、結婚するんですか……？」

「両親の仕事関係で仕方なくね。でも、お断りするつもり」

今回のお見合いは、あくまで両親の顔を立てるためのものだ。それだって、父に恵介への気持ち
を疑われてさえないなければ、断っていたかもしれない。

「適当に食事を楽しんで、すぐに終わると思うわ」

「なーんだ、やっぱりそういうことかあ」

『やっぱり』って？』

「あつ、ごめんなさい！ 深い意味はないんです。ただ小百合さん、結婚には興味なさそうだった
から、『お見合い』なんて意外で少し驚いて。でもご両親の関係なら納得です」

一流企業のご令嬢だとそういうお付き合いもあるんですね、と三村はうんうんと頷く。

「でもせっかくの機会ですし、初めからお断り前提でもつたいなくないですか？ 小百合さん
ずーっと彼氏いないですし、もしかしたらこれが運命の出会いになるかも！」

「運命の出会いって……そんな、漫画や小説じゃないのよ？」

苦笑すると、三村は「何を言ってるんですか！」とピシッと指を小百合に突きつける。

「出合いは一期一会！ だからこそお客様同士の出合いも大切に！ ……これ、前の会社に入った
時、小百合さんが初めて私に教えてくれたことですよ？ なのに小百合さんったら、自分のことは
てんで無頓着なんですよ。ダメですよ、お客さんだけじゃなくて、自分も大切にしなきゃ！」

「粗末に扱ってるつもりはないけど……」

「とにかく、もっと自分に興味を持たないと！ せっかくのお見合い、楽しまなきゃ損ですよ？」

余計なお世話、と思えないのはやはり気安さ故だろう。小百合は「分かったわ」と曖昧な笑みを

向けて、今日は友人と食事をする予定だという三村を見送った。
賑やかな三村が帰ると、途端にオフィスは静寂に包まれる。

『やっぱり』かあ……』

三村の言葉に他意はないと分かっている。しかしそう言われてしまうのもどうなのだろう。

結婚を斡旋する立場の人間が、自身の結婚には無頓着。

実際、「社長が未婚」であることが仕事に影響を与えたことも、なくはなかった。

結婚相談所を利用して、残念ながら成婚に至らない例は当然存在する。その中には、稀に「マ
リエ・リリーズに原因がある」と主張する人もいた。そんな中、小百合が言われて最も困るのは、
この一言。

社長が未婚だと知っていたら、登録なんてしなかった、というものだ。

とはいえ、婚活コンサルタントは既婚でなければならぬ、なんて決まりはない。それでも気に
してしまうのは、全て自分の問題。人の結婚は前向きに捉えられるのに、自分は結婚したいと――
恋人が欲しいと思わない。

恋人が出来れば肉体的な関係も発生する。それは、小百合にとってはトラウマ同然だ。

キスマスでなら、多分、大丈夫。でもそれ以上――異性と素肌を触れ合うのは、怖い。

あの時の経験は、小百合の中に深く根付いてしまった。普段は、仕事と自分は切り離して考えて
いる。でもふと冷静になった時、恋をしたいと思わない自分を、まるで欠陥品のように感じてしま
うことがある。

小百合の好みのメイクや服装は、清楚系よりセクシー系。そんな見た目もあって、過去の恋人たちは、小百合が異性との肉体経験がないとは思わなかったらしい。しかし初体験の苦い記憶を理由に小百合は、彼らと深く付き合うことを拒んでしまった。でも、それだけではない。

(心のどこかで、恵介さんと比べてしまった)

別れの原因は、誠実に向き合うことのなかった小百合にも十分にある。

(……吹っ切った、つもりなんだけどなあ)

恵介への気持ちは、結婚式の夜を最後に思い出にした。でも、だからと言ってすぐに「さあ、彼氏を作ろう！」とも思えなくて。

——もしも、感情の全てを持っていかれるような恋が出来たら。

——この人しかいない、そんな人が現れたら。

恵介への気持ちは淡くて幼いものだった。だから小百合は、「この人だけが欲しい」なんて強い感情は知らない。でももしも、そんな人が目の前に現れたら……？

(……なんて、ね)

そんな人物がいたら、今回のお見合いを受けることも、そもそも父に恵介への気持ちは疑われることもなかっただろう。そんなことを考えているうちに、時間は予定の十九時。小百合はオフィスを出たのだった。

時間には余裕をもって出たが、ホテルの最寄り駅まであと一駅、というところでそれは起きた。

『お客様にお知らせいたします。ただいまこの列車は——』

車内にアナウンスが響く。どうやら次の駅でトラブルが起きたらしく、小百合を乗せた電車は、目的の一つ前の駅で停車してしまったのだ。その後も電車が動き出す様子はなく、駅のホームには乗車を待つ人が溢れてきている。小百合は腕時計に視線を落とした。十九時二十分。時間には少しだけ余裕はあるが、このまま待っていたら遅刻してしまうかもしれない。ならば、と小百合は一駅手前のここで降りて、タクシー乗り場へと向かった。

だが駅の改札から出た瞬間、足が止まる。タクシー乗り場には、既に乗車を待つ人の大行列が出来ていた。この時点で十九時三十分。順番が来る頃には待ち合わせ時刻を過ぎてしまうかもしれない。小百合はスマホのアプリを立ち上げて、ホテルまでの道順を確認する。

(この時間なら、歩けばまだ間に合うわ)

列から離脱すると、足早に歩き出す。しかし今日に限って、ワンピースに合わせて高めのヒールを履いているため、なんとも歩きにくい。ホテルに着いて、身だしなみを整える間もなくお見合い開始……なんてことは、絶対に避けたい。そのためにも、せめて五分前には到着したかった。

そんな小百合の願いが通じたのだろうか。進行方向からこちらに向かってくるタクシーが目に入る。「空車」と表示されているのを見て、ほっとした。

(良かった、なんとか間に合いそう！)

片手を挙げてタクシーを止めようとした、その時だった。不意に小百合の目の前に、スーツ姿の男性が割り込んでくる。その人物は、呆気にとられる小百合をよそに大きく手を挙げた。

タクシーは、当然のように彼の前に停車する。小百合は慌てて男性を呼び止めた。

「ちょっと、それには私が……」

私が乗ろうと思っていたのよ——そう言いかけた言葉は、振り返った男性の顔を見た瞬間、どこかに行ってしまった。

小百合を見て固まったのは、その男性も一緒だった。

切れ長の二重の瞳に、彫りの深い顔立ち。至近距離で見ると、その顔がいかに整っているかが分かる。芸能人やモデルでさえ、彼の前では霞んで見えるかも知れない。そう思わせるほどの美男子。

——三カ月前、ホテルのバーで出会った「失礼男」が、そこにいた。

「君は……」

男性もまた驚きを露わに小百合を見つめている。先に言葉を発したのは、男性の方だった。

「……ここで会うなんて驚いた。その様子だと、君もこれに乗るつもりだった？」

「そ、そうですけど……」

「だろうね。でも、すまないが今は譲ってほしい。急いでいるんだ」

「急いでいるのは私も同じです！ 今すぐ逢坂ホテルに行かなきゃいけないんですから」

小百合が言い返すと、男性は肩をすくめる。

「別に、そんなに急ぐ必要はないだろ？ ゆっくり行つて食事でも楽しめばいいのに」

「なっ……!」

まさかそんなことを言われるとは思わず小百合は啞然とする。

「あ、あなたの方こそ別のタクシーを拾えばいいじゃない！」

「その余裕があったら、ホテルで大人しくタクシーを手配してるよ。迎車を待つ時間も惜しかったから、ここにいるんだ。この大通りならすぐに拾えると思つたからね」

方角から、彼が逢坂ホテルから来たのは間違いないだろう。これからそこに急いで向かうと言つた小百合に、「急ぐ必要はない」「ゆっくり行け」だなんて、どこまでも失礼な男だ。

「とにかく、今回は譲つてもらおうよ。急な話で本当に申し訳ないと思つてる。この埋め合わせは、必ずするから」

言つて彼は、胸元から名刺らしきものを取り出すと小百合に握らせた。

「そんな、勝手なことばかり言わないで……つて！」

小百合の言葉を最後まで聞くことなく、扉が閉められる。あまりの展開に呆然とする小百合の前で、窓が半分ほど開いた。

「そこに俺の連絡先が書いてある。君の都合の良い時でいい、いつでも連絡して」

「ちょっと、待っ——」

待つて！ と止める間もなく、窓は閉まった。

「……信じられない」

遠ざかるタクシー。立ち尽くす小百合の手には、名刺だけが空しく握られていた。

その後の展開は、小百合が予想した通りだった。結局歩いてホテルに向かい、十分以上遅れて到着した。そのまま身だしなみを整える間もなく、会場であるホテル内の料亭へと急いだ。

しかしいざ着いてみれば、約束した相手の姿はどこにもなく——店のスタッフから聞かされたのは、先方は既に帰ったという知らせだった。なんでも急用が入ってしまったらしい。

「逢坂様からは、是非食事を楽しんでくださいと言付かっております」

スタッフからはそう伝言をもらったけれど、「分かりました」とその場で一人食事が出来るほど、小百合はふてぶてしくなれなかった。

ホテルのエントランスを出て、最初に目に飛び込んだタクシーに思わず足を止める。心も体もすっかり疲れていたけれど、今はタクシーに乗る気分にはなれなかった。

（「帰った」って、十分の遅刻で……？）

今回の見合いを希望したのは先方だ。ならば、十分そこで席を立つのはどうなのだろう、と思わなくてはならない。

（ああ、でも、逢坂ホテルの御曹司だから、分刻みのスケジュールだったりするのかも）

とにかく、考えたところで仕方ない。結局は、小百合が遅刻しなければ良かっただけの話だ。

（きっと、お見合いは破談だわ）

初めからお断りする予定だった。でも、すっぱかすつもりなんてなかったのに。先方は気分を害したことだろう。両親の顔にも泥を塗ってしまった。それ以上に小百合には懸念事項がある。

（……父さんにわざと遅刻したって思われたら、どうしよう）

今回のお見合いを受けた最大の理由は、父に恵介への気持ちを指摘されたから。それを払拭（ふっしょく）するためにここに来たのに、まさか、疑念を深めることになるかもしれないなんて……

それもこれも、全ての元凶は——

「あそこで邪魔されなければ……！」

抑え込んでいた怒りがふつふつと沸き上がる。眉間に皺（しわ）を寄せた小百合は、バッグの中につつまんでいた名刺を取り出す。渡された時は驚きと急いでいるのもあって、確認する暇もなかったのだ。

——株式会社逢坂スペースソリューション 営業部部长・藤堂瑞樹。

名刺にはそう記されていた。お見合い相手と同じ名前とは、なんの因果だろう。それにこの社名には見覚えがある。「逢坂」の名前を冠している通り、逢坂ホテルグループ傘下（さんか）の企業の一つだ。確か、逢坂ホテルの施工管理や、施設の設計を手掛けている子会社だったはず。

藤堂瑞樹。

直視するのが躊躇（ためら）われるほどの美形だった。会ったことがあるのは、三カ月前の一度だけ。それなのに見た瞬間、「あの時の人だ」と強烈に記憶が蘇（よみがえ）った。

『——だって、酷い顔だ』

そして、バーで言われた屈辱的な一言も。

（……思い出したら、またムカムカしてきた）

年齢は多分、三十代前半。あの若さで逢坂ホテルグループ企業の営業部部长なら、なかなか優秀な人物なのかもしれない。しかし、いくら優秀だろうと小百合にとっては関係のない話。

（何が、「この埋め合わせは、必ずする」よ）

万一、これで宮里グループと逢坂ホテルの関係に亀裂が入ったら、その補填（ほてん）をしてくれるとでも

いうのか。藤堂は、あくまでグループ傘下の社員。そんな力があるとは思えない。

「……ああもう、どうしよう」

まずは、両親に今日の報告をしなければ。逢坂瑞樹と会いさえすれば、断ったところで丸く収まると思ったのに。今日の事の次第を知った父が何を思うのか、予想がつかないだけに頭が痛い。疲れた体で帰途に就いた小百合は、靴を揃える余裕もなくバッグをソファに投げると、ぐったりと腰掛けた。ここは、最寄駅から徒歩十分のLDKのマンション。築年数は二十年ほどで、近隣の相場より比較的安めだったこともあり三年前の独立を機に契約した。

実家を出て初めての一人暮らしに初めは慣れなかったものの、今では立派な小百合の城だ。

(とにかく、電話しないと)

ソファに座り込んだ小百合は、自宅へと電話をかけようとスマートフォンを手に取った。直後、不意に振動する。慌てて画面を見れば今まさにかげようとしていた相手——正史からの着信だった。まさかこのタイミングで来るとは……小百合は恐る恐る通話ボタンを押す。

「……もしもし」

『小百合、今電話しても大丈夫かな?』

「大丈夫よ。……あのね、父さん。今日のお見合いんだけど実は、私が遅刻してしまって……ホテルに着いた時には、逢坂さんはもう帰られていたの。その、急な仕事が入ったみたいで……」

『ああ、そうらしいね。さっき、先方から連絡があった。彼は、遅刻のことは全く気にしていなかったよ。むしろ自分の都合で今日を指定したのに、先に帰ることになって申し訳ないと言ってい

た。それよりも小百合、彼から伝言を預かっているんだ』

「伝言……?」

なんだか、嫌な予感がある。身構える娘とは対照的に、電話越しの父は嬉しそうに続けた。

『彼は是非、このお話を進めたいそうだ』

もたらされた予期せぬ言葉に小百合は言葉を失った。

『今日は残念だったが、日を改めてもう一度ゆっくり会いたいと言っていたよ。となれば、日にちについてだが……』

「ま、待って父さん!」

小百合は慌てて父の言葉を止める。

「逢坂さんがそう言っているのは分かったわ。でも、こちらの返事は、まだ待ってもらって!」

その返事に正史は不満そうな声色を返してきたけれど、こればかりは小百合も譲れない。

「とにかく、来週の日曜日に帰るから! その時、もう一度話し合いますよ。ね?」

『——分かった。ではまた、日曜日に』

電話が切れた瞬間、どっと体が重くなったような気がした。帰宅した段階で既に疲れ切っていたけれど、父の話は、結果的に小百合の疲労を一層深めることとなったのだった。

翌日の木曜日。来週末には実家に帰らなければならぬ。それまでに考えることは山積みだ。せめて仕事だけは平穩に終わりますように——そんな小百合のささやかな願いは、残念ながら叶わなかった。

通常マリエ・リリースでは、顧客との面談は主にオフィスの一室で行う。顧客が希望した場合はカフェなどでお茶と雑談を交えてすることもあるものの、今回は前者だ。

現在、木曜日の十七時。定時まであと一時間。小百合の今日の予定は、面談があと一件残っているだけだ。しかし、この最後の顧客こそが曲者だった。

「またお断りって、どういうこと？ 一体、私の何がいけないって言うの、ねえ！」

小百合の目の前に座り、目を吊り上げてこちらを睨む彼女の頬は、真っ赤に染まっていた。それは怒り故か、はたまた羞恥心からか——

(……両方、よね)

まずは、落ち着いてもらわなくては。小百合は冷静に、相手を刺激しないように言葉を選ぶ。

「大野様にいけないところなんてありません。ただ、理由は今までもお伝えしましたように——」

「遠回しな言い方なんてしないでいいわよ。結局は『理想が高い』って、そういうことでしょ？」

その通り、自分でもよく分かっているじゃない——なんて、口が裂けても言えない。

しかし、もしも小百合が彼女の気の置けない友人だったならば、こう言っていただろう。

——もう少し現実を見た方がいい、と。

大野が結婚相手に求めている条件。それは、俗に言う「三高」——「高収入」「高学歴」「高身長」である。バブル期ならいざ知らず、二十五歳の彼女がそれらを条件に挙げた時は本当に驚いた。年収は一千万以上。都内にマンションもしくは土地を持つこと。夫の両親とは完全別居が条件で、長男は論外。次男もしくは三男であること……こんなに条件の揃った男性は、マリエ・リリースの全登録男性の中でもほんの一握りだ。一方の大野といえば、中小企業に勤めるごく一般的なOLである。

もちろんそれが悪いなんてことは微塵もない。こんな風に髪が逆立ちそうなほど怒っていないければ、彼女はいたって可愛らしい今の女性だ。趣味は御朱印集めと美術鑑賞。休日アウトドアよりも自宅で読書をしている方が好き——と、どちらかといえば清楚で真面目な女性だと思う。

しかし、彼女が求める好条件の男性は、当然ながら競争率も高い。せめてもう少し条件を絞らなないと……今までもそう伝えてはいるけれど、今回もまた、大野は納得がいけないようだった。

「宮里さん。あなた今、恋人はいるの？」

「いえ、いませんが……」

「でしょうね。……もう、最悪。社長が恋人もいない独身なんて知ってたら、初めから入会なんてしなかったのに。そんな人に女性会員の……私の気持ち分かるの？ とにかく！ こっちは安く

ないお金を払っているんだから、もう少しなんとかしてよね！」

そうして大野は、これ以上話しても無駄だと言わんばかりの態度で出ていった。

——本場に運が悪い時は、どこまでもついていけないものだ。

『独身の社長なんてありえない』

(このタイミングで言われるのは、ちょっときついかも)

こればかりは深く考えても仕方のないこと。頭では分かっていることも、気にしていることを真正面から指摘されるのは、なかなか辛い。その後はとても残業する気にはなれなくて、小百合は終業時刻とともに帰社した。そのまま駅前のカフェに向かい、珈琲を片手に一人項垂れる。

(……なんなの、もう。私はただ、仕事を頑張りたいだけなのに)

誰も彼も皆、どうしてそんなに自分に結婚させたいのか。

お願いだから放っておいてほしい自分と、結婚に興味を持たないのを欠陥品だと思ってしまう自分。その二つの感情がぶつかり合って、一体どうすればいいのか、何が正解なのか分からない。

相手は、あの逢坂ホテルの御曹司。それこそ大野が理想としている相手と言えるだろう。

(いっそのこと、私と代わってくれればいいのに)

そんなひねくれたことを考えてしまうほどには、疲れ切っていた。

小百合の中で断ることは、決定事項。問題なのは、その「理由」だ。もしもあの日遅刻しなければ、性格が合わないと言っても言っただけでも出来た。だが実際に逢坂瑞樹と会っていない小百合には、それは使えない。

父の中にある、「小百合が恵介を好きかもしれない」疑念を払拭するためにも、何か、父を納得させるだけの断る理由を見つけてなければ……。でも、そんなすぐに見つかるはずもなく。

(それもこれも全部、あの人のせいだわ)

小百合は、名刺ケースから昨日渡された名刺を取り出した。

藤堂瑞樹。顔だけは素晴らしく整った、けれども皮肉っぽい男。彼のことを思い出すと今でもムカムカする。あの、人を小馬鹿にした態度といい口調といい、絶対に好きになれないタイプの人間だ。

——そう。恵介などとは、まるで正反対のタイプの男性。

(そういえば、彼、あの時……)

ふと小百合は、三カ月前、藤堂と初めて会った時のことを思い出す。

『何度も言っている通り、俺はまだ誰とも結婚するつもりはない』

『両親に呼び出されて来てみたら、知らない女の子が「婚約者です」って待ってるんだ。冗談じゃないよ』

あの言葉から推測出来ること。もしかしたら彼は、小百合と似たような状況にあるのではないか。

その瞬間、頭の中でパチリ、とパズルがはまったような気がした。

(……理由、見つけたかも)

小百合は残りの珈琲を飲み終えると、速足で帰宅する。夕食を取ることもなくシャワーを浴びてすっきりすると、スマートフォンを片手にソファの上に正座した。